

## 2019年度 一般社団法人日本社会福祉学会 学会賞受賞に寄せて

学会賞審査委員会による審査の結果、2019年度の学会賞が決定し、学術賞（単著部門）として齊藤雅茂会員、奨励賞（論文部門）として上白木悦子会員が選ばれました。

第67回秋季大会期間中の2019年9月21日に、大分大学旦野原キャンパスにおいて、開会式に引き続き授賞式が行われました。

受賞された方々からの喜びの声をお届けします。



左から白澤委員長、木原副会長、金子会長、齊藤会員、上白木会員

### ◆ 学術賞（単著部門） 齊藤 雅茂（日本福祉大学）

受賞作：『高齢者の社会的孤立と地域福祉

計量的アプローチによる測定・評価・予防策』

（明石書店、2018年3月24日刊）

高齢者の社会的孤立は、老年学から疫学・公衆衛生学、社会政策学、都市計画学など学際的に取り組むべき研究課題である（AARP Foundation 2012）と同時に、ソーシャルワーカーがその専門性を発揮できる領域（Lubben et al. 2015）とも言われています。この間、国内では関連書籍が既に多数刊行されています。しかし、その実証的な研究・知見の蓄積は意外に乏しく、何がどこまで明らかになっているのかという整理は必ずしも十分でないと考え、本書の企画に至りました。また、本書では、孤立傾向にある高齢者は比較的少数であり、かつ、調査協力を得られにくい可能性が高いことを考慮し、より頑健な知見を得るために、ある程度（数千～数万人）の規模で行われた複数の調査データを用いることを試んでいます。

本書を構成する各章の初出論文に共著者がいることから明らかなように本研究には多くの方々から様々な形でご助言・ご支援を頂いております。大学院在籍時に本研究の問題関心を共に議論して頂いた冷水豊先生をはじめ、本研究の実施および出版に際してご指導・ご支援を頂いたすべての皆様に心より御礼申し上げます。また、何よりこの研究は様々な調査デ

一タに基づいており、いずれも調査対象になった皆様と関係機関の皆様の協力なしには成り立ち得ないものです。とくに本書ではあえて「計量的アプローチ」ということを強調していますが、その基盤には院生時代にご自宅へ訪問させて頂いたお一人暮らしの方々の語りやエピソードがあります。研究の主旨・社会的意義にご賛同のうえ、ご協力下さいました全ての皆様に改めて御礼申し上げます。

本書は私にとって初めての単著です。学際的な共同研究を重視してきた自身にとって「単著」での出版という形に若干の抵抗はありましたが、個々の原著論文では書ききれないような研究の全体像を示す機会と考えて取り組んで参りました。不十分な点や残された課題は多々ございますが、この度このような栄えある学術賞に選出して頂き、大変光栄に思っております。本書を精読して下さいました審査委員会の先生方に深謝申し上げます。今後とも研究のための研究ではなく、政策や実践に貢献できるような、また、学際的・国際的に引用されるような社会福祉研究を発信していきたいと考えております。

◆ 奨励賞（論文部門） 上白木 悦子（大分大学）

受賞作：『緩和ケア・終末期医療における医療ソーシャルワーカーの役割遂行の構造に関連する要因』

（『社会福祉学』第59巻3号掲載 2018年12月31日刊）

この度は、日本社会福祉学会 奨励賞（論文部門）という荣誉ある賞をいただき、誠にありがとうございます。

まず審査委員の先生方に対して、深く感謝を申し上げます。また、本論文の基礎となった調査に対してご協力をくださいました現場の医療ソーシャルワーカーの方々、並びに本稿の執筆にあたり貴重なご助言をくださいました先生方、とくに、青木邦男先生（山口県立大学名誉教授）というわたくしの恩師へ厚くお礼を申し上げます。

本研究は、緩和ケア・終末期医療に関する医療ソーシャルワーカーの役割の遂行に着目し、全国のがん拠点病院を中心に、そこに勤務する医療ソーシャルワーカーを対象に量的調査を行ったうえで、そのデータを、共分散分析により解析し、結果の考察をしたものです。

医療ソーシャルワーカーの役割遂行の現状を明らかにし、同時に、そこに関連する要因として、コンピテンシー、コーピング、死に対する態度、職場・職業への適応感が相互に関連しながら医療ソーシャルワーカーの役割遂行を規定していることを、明らかにしました。

私は、10数年前まで、医療機関で医療ソーシャルワーカーとして実務に従事していましたが、その際に、実体験を通じて、緩和ケア・終末期医療における医療ソーシャルワーカーの活動の意義や課題を認識するようになりました。

今回の調査からわかったこととして、10数年前の状況から改善されていることもあれば、残念ながら、医療ソーシャルワーカーの方々の戸惑いや不安に直面する回答もありました。

それは、周囲からの協力を得てもなお、患者と関わる時間がない、自分の知識や技術に自信を持ってない、人間の生の最期や死の瞬間に立ち会う準備ができていない、といった、切実な思いでした。

今回は、量的調査にとどまりましたが、こうした知見は、医療ソーシャルワーカーの活動のあり方を検討する上で、今後、重要な基礎資料になりうるものではないかと考えています。

今回の受賞を機に、現状に満足することなく、これからも研究に精進し、学問と実践の発展に、わずかながらでも貢献できればと考えております。

このたびは、身に余る貴重な機会を与えていただきまして誠にありがとうございました。改めて、深く感謝を申し上げます。